

華子姫



ミスエド



皇玉



乙女サザンカ いずれも佐倉市



冬彩るサザンカ140品種300鉢

佐倉で特別企画 文化史も紹介

佐倉市の国立歴史民俗博物館くらしの植物苑で、特別企画「冬の華サザンカ」が開かれている。今年は約140品種約300鉢が並び、サザンカの文化史につ

いてもパネルを使って紹介している。来年1月31日まで。

同苑では2001年から、サザンカのさまざまな品種を収集し展示してき

た。主に担当したのは、日本ツバキ協会長の箱田直紀・恵泉女学園大学名誉教授(82)。1日にあった展示解説会では、サザンカの歴史について話した。

サザンカは日本原産の花。沖縄から九州・四国西南部に野生するが、白色の一重の花だった。それがツバキと自然交配し、いろいろな花が生まれ、それを人間が選り出して増やし、次の世代に引き継いできた。

サザンカにはこれまでに4回流行期があった。最初は元禄時代前後。1600年ごろから1700年ごろまでは園芸品種がどんどん増えていった。この時代は大名や公家など上流階級の園芸だった。

こうした流れを引き継いだのが植木屋。その集団が活躍した江戸時代後期の文化文政期(1804〜30)に2回目の流行期を迎える。美しい花が商品として出回り、主に江戸で大衆化した。

その流れが明治時代中ごろには埼玉県に中心が移り、川口市の安行地区など

で、新しい品種が育てられた。しかし、その後、日本全体が西洋からの草花の人氣に圧倒されていく。

復活したのが1950年代。サザンカも含めたツバキブームが起き、全国に広がった。60年代には、それまで一重か二重だった花に八重が出てきて、人氣になった。「本来晩秋の花だったサザンカが、冬の華やかな花にイメージが変わった」と箱田さん。

しかし、そのブームもピークは80年代だった。現在は新品種も開発されているものの、ブームとしては下降線をたどっている。問題となるのが品種の保存だ。箱田さんは「次の時代に残せる基盤はできた。同苑をはじめ、フラワーパークや、植物園など公的なところで残り、将来へつなげていくだろう」と話す。

大人1000円。12月14、21日と年末年始(27日から来年1月4日)、来年1月12、18、25日は休館。問い合わせはハローダイヤル(050・5541・8600)へ。(稲田博一)